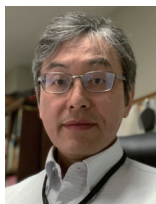


TICAD8サイドイベント: 「母子健康手帳と情報のデジタル化について」の開催報告



長崎大学熱帯医学研究所副所長/教授

金子 聰

64年神奈川県生まれ。防衛医科大学校卒。国立がんセンター(当時名)を経て、05年から長崎大学教授。ケニアを中心に母子登録の開発も含め、疫学・公衆衛生学研究を展開している。



認定NPO法人ロシナンテス理事長
長崎大学・熊本大学・九州大学客員教授

川原 尚行

65年北九州生まれ。九大医学部卒。06年NPO法人ロシナンテスを設立。スーダン、ザンビアで支援活動を行う。地域に医療が届く仕組み作りを模索している。

第8回アフリカ開発会議(令和4年8月27日及び28日、チュニジアにおいて開催)にあわせて、公式サイドイベントを実施しました。同会議は、1993年から日本政府が主導し開催しているアフリカの開発をテーマとする国際会議で、英語では、TICAD(Tokyo International Conference on African Development)と称しています。新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響で、今回、すべての公式サイドイベントは、オンラインで実施することとなりました。私たちが開催したサイドイベントは、「母子健康手帳と情報のデジタル化: アフリカの母子に対する恩恵と公衆衛生への貢献(Digitalization of Maternal and

Child Health Handbooks and Information: Benefits to Mothers and Children and Contributions to Public Health in Africa)」というイベントで、令和4年9月15日にアフリカの時間も考慮し、17:30-19:15(日本時間)の時間帯でオンライン開催しました。用いた言語は、英語で、同時通訳による日本語も提供し、国内の参加者を多くすることに務めました。

主催は、国立大学法人長崎大学、認定NPO法人ロシナンテス、そして、公益社団法人日本WHO協会の3者とし、内閣府、外務省、厚生労働省、デジタル庁、JICA、公益財団法人 風に立つライオン基金から後援を頂きました。サイドイベント事務局は、長崎大学熱帯医学研究所が担当しました。

本サイドイベントの背景

母子健康手帳は日本で始まり、アフリカをはじめとする途上国にも普及が進んでいます。母子の健康状態や子どもの成長を記録するという点で、その恩恵は非常に大きいものである一方で、紙面による運用がなされているため、公衆衛生、そして集団としての母子に対するサービスの向上にその記録が十分活かされていません。あらゆる分野でのデジタル化が進む昨今、スマートフォン等を使って母子の健康を集団として把握し、悉皆的に

(誰一人取り残さないように)多くの母子のためになるシステムを構築することが望まれています。そのためには、母子健康手帳や母子登録に関わるすべての関係者が共通認識を持ち、個々の母子と集団としての母子の双方にメリットをもたらす仕組みを構築する必要があります。それは、母子健康手帳が現在の位置づけに加えて、公衆衛生的な役割を果たせるものでなければならず、母子保健の計画や施策の企画・評価などに活用されるシステムとすべきです。異なるアプリやシステムが乱立し、情報の散在と利用効率の低回を避けるためにも、開発過程から情報を共有するプラットフォームを構築し、開発者、ユーザー、行政、医療関係者などが、広く開発に参加できる体制を整えることが必要です。また、取り扱われるデータには個人情報も多く含まれることから、個人情報の保護の観点からの検討を進める必要があります。今回、TICAD8の開催を受け、母子健康手帳を世界に広める日本として、率先して世界の関係者を束ねる責務があるとの考えから、上記提案と次の段階に進むための情報共有と意見集約の場として、今回のサイドイベントを開催することとしました。

サイドイベントの実施内容について

令和4年9月15日の17:30-19:15




TICAD8サイドイベント: 「母子健康手帳と情報のデジタル化について」の公式ウェブサイト (URL: <http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/ticad8-mch-digital/>)


Video Clips and Presentation Materials

TICAD8 official side event, "Digitization of Maternal and Child Health Handbooks and Information, Benefits for African Mothers and Children and Contribution to Public Health," was successfully concluded.
Video clips and presentation materials of the day are posted here courtesy of the presenters.

English version



Japanese Translation version



Materials used for Presentations

- Prof. Yasuhide Nakamura at Opening Remarks
- Panelist team A from Cameroon by Dr. Mbambole Grâce Alake
- Panelist team B from Kenya by Dr. Samson Nzou Muuo et. al.
- Panelist team C from Sudan by Prof. Ahmed S. A. Eisayod
- Panelist team D from Ghana by Dr. Patrick Kurma-Aboagye and Dr. Akiko Hagiwara

公式ウェブサイトの内容を公開しているページ
公式サイトのVideo Clips and Presentationsのボタンからリンクしています。
発表内容は英語ですが、動画は、同時通訳で日本語です

(日本時間) のスケジュールで本 TICAD8 サイドイベントをウェビナー開催しました。オンラインでの参加者は、193 名で、アフリカ 13 か国を含む 24 か国から参加を得ました (パネリストを含む)。また、スーダンでは、パブリックビューも行われ、現地での会場参加者は、60 名にも至りました。

司会は、若手のホープ、加藤美寿季先生 (大阪国際がんセンターがん対策セン

ター政策情報部) にお願ひしました。

まず、Prof. Miriam K. Were (第 1 回野口英世アフリカ賞受賞者) からの祝辞をビデオメッセージにて披露。母子健康手帳の果たしてきた役割や今後のデジタル化に向けての期待が述べられました。とても、印象的なスピーチでした。引き続き、お話しされた武見敬三先生 (参議院議員) からは、新型コロナウイルス感染症パンデミックにより認識された医療

情報の標準化の重要性の認識、そして、母子健康手帳のデジタル化においても同様に標準化の取組の必要性和期待が述べられました。まさしく、本シンポジウムの目指すところを的を得て、お話し頂きました。最後の祝辞として、国際協力機構 (JICA) 理事の井本佐智子氏にお話し頂きました。これまで JICA が取り組んできた母子健康手帳普及事業と今後のデジタル化に向けての期待が述べられました。まさしく、日本が母子健康手帳のデジタル化に取り組むべき背景があることが良く理解できました。そして、主催団体のひとつである公益社団法人 日本 WHO 協会からは、中村安秀理事長が母子健康手帳の歴史から国際的拡がり、母子健康手帳のデジタル化と母子登録についての説明をスライドを用い行い、本シンポジウムの開会を宣言しました。

シンポジウムの最初のセッションでは、パネルディスカッションに参加するアフリカ 4 ヶ国 (カメルーン、ケニア、スーダン、ガーナ) から、各国の母子健康手帳の状況とそのデジタル化に向けた取組が発表されました。Dr. Mbambole Grâce Alake (カメルーン共和国 公衆衛生局予防接種担当副局長・家族健康局長) からは、カメルーンの母子健康手帳普及の現状が述べられました。カメルーンでは、紙面ベースの母子健康手帳の普及も、

重要な課題であり、母子健康手帳の普及が母子への保健医療サービスに向けての課題であることが述べられました。ケニアからは、Dr. Samson Nzou Muuo (ケニア中央医学研究所)、幸田芳紀氏 (NEC バイオメトリクス研究所、長崎大学熱帯医学研究所客員研究員)、宮道一千代氏 (長崎大学熱帯医学研究所特任研究員) がケニア国内で実施しているデジタル母子登録と新生児生体認証の応用に関する活動を発表しました。母子登録とは、母子健康手帳とは少し異なり、保健医療施設で母子健康手帳の情報を入力し、登録する仕組みのことです。新生児に対する

生体認証が開発されており、生後2時間で新生児の指紋を登録し、その後も認証出来るという内容は、今後に期待が持てました。次に、スーダンからは、Prof. Ahmed S. A. Elsayed (スーダン Alzaiem Alazhari University) がスーダンにおける母子への医療サービスと連携した母子健康手帳の開発についての報告をしました。携帯電話のアプリを用いた母子への医療サービスの提供システムの構築を目指しており、母子健康手帳のデジタル化を超えた、医療のDX化にいち早く取り組んでいる姿勢がとても新鮮でした。最後に、ガーナから、Dr. Patrick


Kuma-Aboagye (ガーナ共和国保健局長) と萩原明子氏 (JICA ガーナプロジェクト専門員) から、JICA 事業として展開されている母子健康手帳のデジタル化事業についての発表がありました。すでに母子健康手帳のデジタル化に向けての取組をはじめていたことは、強いインパクトを与えました。

引き続き、ファシリテーターを仲佐かおひ氏 (認定 NPO 法人ロシナンテス) に、発表チームによるパネルディスカッションに移行しました。母子健康手帳のデジタル化に向けての課題、さらにそれに向けての日本への期待という題目で、パネリスト (各国 1 名とて実施) から意見を述べてもらいました。

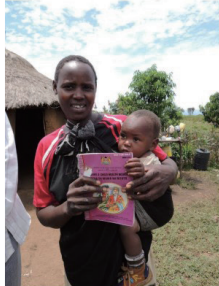
カメルーン代表の Dr. Alake からは、携帯電話の普及率がまだ進んでいないことなど、インフラの問題が多いこと、日本に対しては、それらの支援を求めるとの意見が述べられました。ケニアの Dr. Samson Muuo からは、母子登録に関連する医療従事者へのトレーニング不足などの問題が述べられました。日本に対して、デジタル化に向けた共同した開発体制の確立支援への期待が寄せられました。スーダンの Prof. Elsayed からは、助産師への教育の必要性が述べられ、その専門教育支援への期待が述べられました。ガーナの Dr. Kuma-Aboagye からは、母子健康手帳をすべての子どもに行き渡

TICAD8 side-event

Digitalization of Maternal and Child Health Handbooks and Information: Benefits to Mothers and Children and Contributions to Public Health in Africa



Organizers:
Nagasaki University,
NPO Rocinantes,
Friends of WHO JAPAN



Prof. Yasuhide NAKAMURA, MD, Ph.D.
President, Friends of WHO Japan
(Chair, International Committee on MCH Handbook)

中村安秀理事長 (日本WHO協会) による開会の辞の際に用いられたスライドの一部

らせる、不記載をなくすことが重要であるとの課題が寄せられました。確かに、母子健康手帳を配布しても不記載が多ければ役に立ちません。また、デジタル化に向けた ICT 人材養成など技術面での支援への期待が述べられました。

最後に参加者達の意見をまとめ、長崎大学熱帯医学研究所の金子が本サイドイベントの宣言を発表しました。その内容は以下の通りです。

(宣言内容)

● **母子健康手帳のデジタル化と母子登録の整備の必要性**

すべての母子に効果的に公平なサービスを提供するためには、母子健康手帳のデジタル化推進と母子登録の整備が必要である。

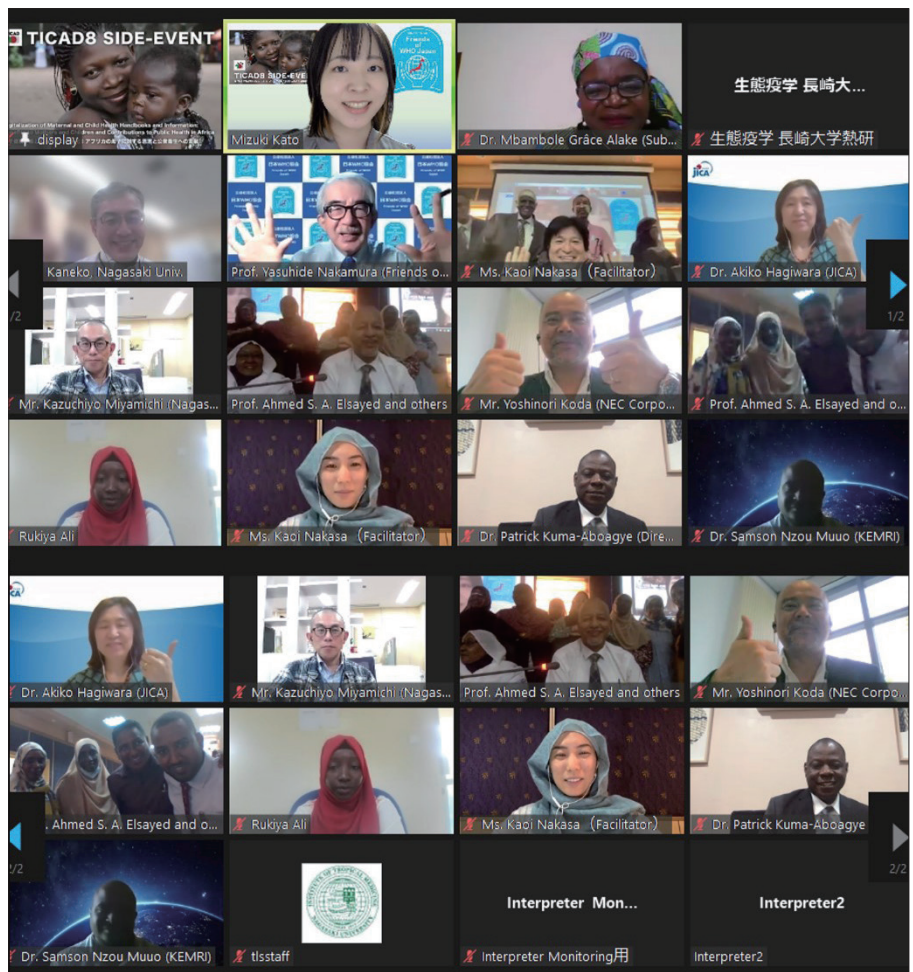
● **母子健康手帳のデジタル化や母子登録のシステムは、すべての関係者の共通理解のもと、開発されるべきである。**

アフリカにおける共通課題を反映したシステムを開発する必要がある。

● **母子健康手帳や母子登録に関わる関係者が集まり、情報を共有できるプラットフォームの必要性**

今回のサイドイベントを契機にコンソーシアムを設立し、情報共有と議論のためのプラットフォームを構築する。

最後に川原(認定 NPO 法人ロシナンテス理事長 / 長崎大学客員教授) が今後の共同作業の必要性、G7 広島サミットに向



発表者の集合写真(オンライン形式で、アフリカ各国、日本各地を繋いで実施した)

けた発信の必要性、JICA も含めた日本からの支援の期待を述べることにより閉会の辞とし、成功裏に本サイドイベントは閉会となりました。

本サイドイベントの動画、ならびに用いられた発表資料は、<http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/ticad8-mch-digital/> から、視聴ならびに入手可能です。